

放送事業を支える大容量ストレージ環境を構築。 「SANRIS Universal Storage Platform」で データ増加への対応とTCO削減を実現

民放大手の株式会社フジテレビジョン(以下、フジテレビ)では、さまざまな業務システムで利用されるストレージの強化を実施した。同社では比較的早くからSAN導入に踏み切るなど、ストレージ環境の整備に積極的に取り組んできた。しかし業務のIT化が一段と進んだことで、将来的な発展性を備えた新たなストレージ基盤を構築する必要性に迫られたのである。ここで採用されたのが、日立の次世代ディスクアレイサブシステム「SANRIS Universal Storage Platform(以下、SANRIS USP)」だ。SANRIS USPの仮想化機能を駆使することで、次世代のビジネスを支える高速・大容量ストレージ環境を低コストで実現。またバックアップをはじめとする運用管理の効率化にも役立っている。

TCO : Total Cost of Ownership



株式会社フジテレビジョン
情報システム局
システム企画部
デスク担当部長
伊藤 春男氏

ITインフラの高信頼化を追求し 放送業務を確実に支える

放送開始以来、数多くのヒット番組を世に送り出しているフジテレビ。その業務をしっかりと支えているのが、同社のIT戦略の一角を担う情報システム局だ。地上デジタル放送のスタートなど、放送事業とITの関わりはより密接になっている。それだけにIT部門が果たす役割も、一段と重要性を増している。

伊藤氏は「業務のIT化が進んだ現在では、システム障害が放送に直接的な影響を及ぼしてしまいます。こうしたことが起きないよう、信頼性・安定性の確保には細心の注意を払っています」と語る。

デジタル技術の進展によって、新たな業務要件も生まれてきた。その一つが、映像素材のデジタルアーカイブだ。フジテレビでも映像のデジタル化とプレビューシステムを技術局が、検索システムと番組関連情報の入力システムを情報システム局がそれぞれ担当し、デジタルアーカイブシステムの構築を進めている。

同社のユニークな点は、こうしたさまざまな業務アプリケーションをグループ企業の株式会社フジミックと共同で自社開発していることだ。伊藤氏は「時代のニーズに合ったシステムをタイムリーに構築していくためには、技術力や

ノウハウを社内に蓄積していく必要があります。そこで自社開発を基本としているのです」と力強く語る。

データ容量の増大に伴い ストレージ利用の効率化が課題に

業務のIT化を進める上では、さまざまな問題もあった。特にメインフレームからオープン環境への移行が進んだ結果、サーバの台数が飛躍的に増加。システムの複雑化や運用負担の増大が懸念されるようになった。そこで同社が取り組んだのがSANの導入である。

「ストレージをSANに集約し、ライフサイクルの異なるストレージとサーバとを分離することで、運用上の自由度が増えないだろうか」と考えたのがきっかけでした」と橘氏は振り返る。

2002年には、日立のディスクアレイサブシステム「SANRIS 9980V」を導入。番組やCMの放送スケジュールを管理する編成営業放送システムなど、さまざまなシステムが接続されることとなった。

もともとこれですべての問題が解決したわけではなかった。その後も先に述べたデジタルアーカイブシステムなどの新システムが企画され、データ容量が急速に増加した。またデータベースのバックアップ作業などにも、



株式会社フジミック
放送システム部
副課長
橘 太郎氏



株式会社フジミック
放送システム部
主任
戸崎 紀行氏

USER PROFILE

株式会社フジテレビジョン

www.fujitv.co.jp

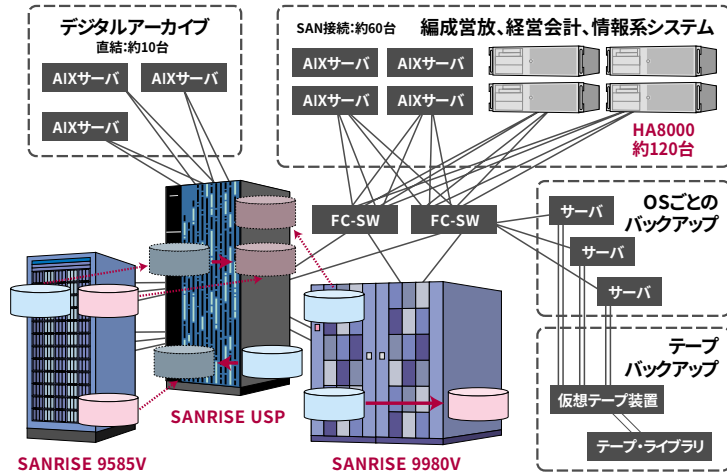
本社 東京都港区台場2-4-8
設立 1957年11月18日
放送開始 1959年3月1日
資本金 1,147億5,035万円
従業員数 1,380名
フジテレビ系列キー局として、多彩なテレビ番組の制作・放送を行っている。また各種イベントや映画制作、番組関連グッズの企画・販売など、さまざまな分野にビジネスを展開

株式会社フジミックス

www.fujisankei-g.co.jp/fujimic

本社 東京都品川区東品川3-32-42
フジテレビ別館
創立 1969年10月1日
資本金 3億円
従業員数 223名
フジサンケイグループのSI企業として総合情報サービスを提供。フジテレビの人事、経理、報道、編成といった基幹システムはもとより、番組・CMが放送されるまでのプロセスをシステム的にサポートしている

フジテレビのSANRIS USPによるSAN接続概要



SANRIS 9980V (左)とSANRIS USP (右)

多くのストレージスペースが必要とされるようになっていた。

戸崎氏は「データベースのバックアップにはSANRISの『ShadowImage』を活用していますが、副ボリュームを2世代管理しているために、オリジナルデータの3倍もの容量が必要でした」と説明する。

ShadowImageは論理ボリュームの複製をほぼ瞬時に作成する機能であり、システム運用と並行してバックアップを実行できるというメリットがある。

「しかしこのままデータ容量が増え続けると、ディスクをさらに増設していかなくてはならない。できるだけ低コストで、より大容量のストレージ環境を実現する方法はないものかと模索していました」と戸崎氏は続ける。

「SANRIS USP」を採用し 大容量ストレージ環境を実現

ちょうどそんな時に発表されたのが、日立ディスクアレイサブシステムのニューモデル「SANRIS USP」である。SANRIS USPには高度な仮想化技術が盛り込まれており、異種ストレージも含めた共通ストレージプールを構築することができる。これによりストレージ／データの効率的利用や、異種ストレージ環境

での効率的な運用を実現することが可能だ。

「安価なディスクアレイ装置をSANRIS USPの配下に置き、副ボリュームとして利用すれば、コストを大幅に削減できます。これは非常に魅力的でした」と語る戸崎氏。伊藤氏も「以前は必要なディスク容量と導入コストが折り合わず苦勞していましたが、SANRIS USPならこうした問題を解消できます。そこで製品発表と同時に導入を決めました」と補足する。

また従来の構成だと、将来的にSANRIS 9980Vをリプレイスする際に、関連するサーバ群を止めなくてはならない点が懸念されていた。しかしSANRIS USPへの集約を進めていけば、こうした作業もやりやすくなる。「まさにニーズにピッタリの製品」(橋氏)だったのだ。さらにSANRIS USPは、システムの信頼性・可用性を向上させる上でも大きな効果が期待できた。戸崎氏は「サーバとストレージはファイバチャネルスイッチ経由で接続していますが、障害ポイントを減らす上ではできるだけ構成をシンプルにしたい。その点SANRIS USPはポート数が192ポートと多く、大量のサーバ群をストレージに直接接続できます。これも気に入った点でしたね」と語る。

SANRIS USPは、2005年2月より本番稼働を開始。現在は外部ボリュームとしてSANRIS 9585Vが接続され、SANRIS

USPの内部ボリュームと合わせて10TBの容量が確保されている。

SANRIS USPの導入効果について、橋氏は「これまでSANRIS 9980Vの良さをさまざまな場面で実感していますので、使い勝手はそのまま維持したかった。その点SANRIS USP配下に置くことで、より安価なモデルでも従来と変わらない性能が得られます。また、SANRIS 9980Vで便利に使っている機能がそのまま利用できるなど、多くのメリットが実現できました」と満足げに語る。

「ShadowImageによるバックアップ以外にも、ファイル転送でバックアップサーバに送っているデータが数多く存在しています。こうしたバックアップ運用もSANRIS USPに統合していくことで、作業負荷の軽減や効率化が図れると考えています」と戸崎氏は期待を寄せる。

フジテレビでは今後もさまざまな業務システムのデータを順次SANRIS USPに集約し、ストレージ活用の最適化を推進していく予定だ。

伊藤氏は「放送事業を支えるインフラを担当する部門として、より信頼性の高いシステムを実現していきたいですね。ITパートナーの1社である日立とSANRISにも、大いに期待しています」と語った。

●記載されている会社名、製品名は、各社の商標もしくは登録商標です

お問い合わせ

株式会社 日立製作所 RAIDシステム事業部 販売企画部
TEL.03-5471-2273 FAX.03-5471-2549 www.hitachi.co.jp/sanrise

SANRIS